SIAF2024ビジターセンター

トーク「都市と自然をめぐる」

2024年2月4日（日） 15:00〜17:00

会場：札幌市図書・情報館1F サロン

登壇者　小町谷圭、石田勝也、船戸大輔（SIAF ラボ）

齋藤精一（パノラマティクス 主宰）、河村佳佑（パノラマティクス）

松島倫明（『WIRED』日本版 編集長）

モデレーター：木ノ下智恵子（SCARTS会場 キュレーター）

本稿は2024年2月4日に行われたトークイベント内容をダイジェスト版として編集したものです。

「都市と自然」を象徴するSCARTSを出発点に

木ノ下智恵子（以下、木ノ下）：札幌国際芸術祭2024（以下、SIAF2024）のテーマ「LAST SNOW」「アートの200年の旅」の出発点として、SCARTSでトークを始めます。ゲストをご紹介します。パノラマティクス主宰の齋藤精一さん、同じくパノラマティクスの河村佳祐さん、『WIRED』日本版編集長の松島倫明さん、そしてSIAFラボの小町谷圭さん、石田勝也さん、船戸大輔さんです。

皆さんの中でSCARTSに初めてお越しになった方、札幌以外からの方はいますか？（数人挙手）ありがとうございます。私も同じで、札幌に来た時、これだけの大都市が豪雪の中で成立していることに驚きました。SCARTSは複合施設「さっぽろ創世スクエア」の中にあり、住所は北1条西1丁目、札幌の街の中心地として建てられました。青森には地吹雪体験ツアーがありますが、さっぽろ雪まつりのように「雪」を都市観光のメインにした祭事が続く都市は珍しく、そういう意味で先駆的といえる札幌の中で、さまざまな機能を帯びるSCARTSは、「都市と自然」を象徴する場所といえます。

SIAFは本来3年に一度ですが、新型コロナウイルスの影響によるSIAF2020の中止を経て、今回6年半ぶりの開催となりました。前回のSIAF2017が開催された際、実はSCARTSはありませんでした。SCARTSは2018年にオープンし、先端的機能を持つスペシャルな図書館である札幌市図書・情報館、4階の札幌文化芸術劇場hitaruと共に「札幌市民交流プラザ」と呼ばれます。SIAF2024は、札幌市内6会場を中心にさまざまな場所で社会実験を繰り広げていますが、ここSCARTSは、それらをめぐる旅の出発点。都市と自然が共存する“札幌の今”をテーマに、自然公園の「ビジターセンター」になぞらえて空間設計しています。私はSCARTS事業統括ディレクターで、今回は会場キュレーターであり、本日はモデレーターを務める木ノ下です。よろしくお願いします。

「ビジターセンター」というコンセプトは、北海道は国立の自然公園が最多で、札幌周辺にも自然公園が多くあることをヒントにしています。環境省が規定する自然公園のビジターセンターの定義には、案内、解説、体験促進、

休憩など6つの機能があるそうです。今回そうした機能を、SCARTSの各エリアに割り当て、5色で色分けしました。たとえば、黄色＝1階のSCARTSモールA・Bを「総合案内」、赤＝1階のSCARSコートを「展示室」といった形です。

青色をたどると「研究室」と位置づけた2階のSCARTSモールCにたどり着きます。そこでは「都市と自然をめぐるラボラトリー」と題し、パノラマティクスとSIAFラボによるコラボレーション展を展開しています。同じく2階のオレンジ色はSCARTSスタジオの「多目的室」につながっており、『WIRED』日本版のポッドキャスト公開収録などが行われています。
芸術祭は、一般的に作品を享受するような、一方的体験が多いですが、今ご説明したように、ここは皆さまが主役です。色々な形で活動を共有し、考える場所なのです。そうした展示内容や、「都市と自然をめぐる」というトークテーマについて掘り下げていきます。自己紹介を齋藤さんからお願いします。

未来に向けて実装する。SIAFとWIREDの共通点

齋藤精一（以下、齋藤）：ありがとうございます。僕と河村はパノラマティクスというチームですが、もとはライゾマティクスというチームから始まっています。ライゾマティクス主宰の真鍋大度は、2014年に行われた1回目のSIAFで故・坂本龍一さんと作品を作らせていただきました（※1）。

僕はアメリカ・コロンビア大学で建築学を学んでいました。でも、9・11（※2）が起きた時、あれだけ大変な状況なのに、建築家が「次に何を建てるか」という話を始めたことに幻滅して、クリエイティブ産業、広告分野に飛び込みました。ちなみに建築学科の頃、ニューヨークのハイライン（※3）に関する調査を行ったのですが、最近は「それが町を壊しているのでは？」と思い始めています。僕は2023年度からグッドデザイン賞の審査委員長をやらせていただく中で、良いと思ったデザインが、時系列が進むにつれ、町にとって悪くなるという現象とは何なのだろう？と疑問に思うことが増えています。

我々はWEBデザインからスタートしましたが、近年は、地域と芸術、アート、デザインを繋ぐ仕事を多く手掛けています。たとえば、奈良県の「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」（※4）、横須賀の「Sense Island - 感覚の島 - 暗闇の美術島」（※5）です。…ちなみに、奈良県の「MIND TRAIL」は昨年4回目を迎えましたが、残念なことに県の文化政策が変わり、終了することになってしまいました。ともあれ、パノラマティクスとしては、鳥瞰から行政の政策や仕組み、民間の関わり方などを提案しています。その際のリサーチや地域制作を担当しているのが、河村君です。

河村佳祐（以下、河村）：河村です。メインの業務はリサーチを行っています。たとえば、SDGsに関してであれば、具体的な仕組みや海外の評価手法などを調べてまとめるといったことを行っています。芸術祭の場合もリサーチを担当しましたが、現地にも足を運び、今回はさっぽろ雪まつり大通2丁目会場の展示物の設計から実装まで携わっています。

松島倫明(以下、松島):松島です。僕はずっと編集者です。2018年から『WIRED』日本版(※6)の編集長をやっています。「未来を実装するメディア」を掲げているのですが、これは単に「こういうニュースがある」「誰かがこう言っていた」ということを伝えるのではなく、その意味と文脈を日本の社会に実装して、未来に対してコミットする(=責任を持って関わる)メディアでありたいという思いを込めています。その点で、パノラマティクスさんのフォロワーでもありますね(笑)。

『WIRED』は約30年前、アメリカ西海岸で誕生しました。当時はインターネットが急速に普及したデジタル革命期。デジタルによって起こる社会の大きな変化を伝えるメディアとして立ち上がったわけです。今回、SIAFでも『WIRED』が掲げた「AS A TOOL」という特集の発端を振り返ると、1960年代に生まれた伝説的雑誌『WHOLE EARTH CATALOG(ホール・アース・カタログ、以下・WEC)』の創始者スチュアート・ブランドから、ケヴィン・ケリー(=『WIRED』創刊エグゼクティブエディター)に数年前に一通のメールが来たことが始まりでした。メールには「何を作ったのか自分は分かっているけれど、何が伝わったのかは分からないものだな」というような内容が書かれていたのですが、実はこれ、WECと日本の雑誌カルチャーの関係について書かれた記事を参照したコメントだったんです。

そもそも『WEC』は「Access to Tools」をタグラインに掲げ、大量生産・大量消費の時代を迎えつつあった60年代のアメリカで「僕らは皆同じ地球に住む村人である」という考えを実践するためのツールを紹介し、当時のカウンターカルチャーに大きな影響を与えました。ところが、当時それを手にした日本の編集者が「このカタログ濃い!」と帰国して作ったのが、男性向けの某ファッション雑誌(笑)。ブラントが引用した英語の記事とは、「アンチ消費主義として生まれ、世界的ベストセラーになった『WEC』が、なぜか日本では消費主義の最先端としての雑誌カルチャーを作ってしまったのは不思議だ」という内容でした。

前置きが長くなりましたが、『WIRED』日本版は、その『WEC』を見上げながら発行してきたのですが、「地球のためにコミットするにはどういうツールがあるか?ということをちゃんと考えた特集号を1冊作りたい」と「AS A TOOL」号を準備していた頃、ヒデさん(=SIAF2024ディレクター・小川秀明氏)から「札幌で国際芸術祭をやる」と相談を受けました。それも「アーティストの作品を展示するだけではなく、未来に向けてコミットするような、実装するような芸術祭にしたい」という内容で、「僕もちょうど雑誌でやろうと思っているんですよ!」と盛り上がったのです。

結局、『WIRED』日本版としては「AS A TOOL」という特集号となり(※7)、ヒデさんはSIAF2024で「LAST SNOW/はじまりの雪」というスペキュラティブ(=思索的)なテーマを打ち出されました。100年前から100年後まで、この200年を飛ぶためにはどういうツールが必要なのか?どういうものをツールとして読み替えられるのか?何を僕らは手にして未来へ向かえばいいのか?…ヒデさんの言葉でいう「ポストプラネット・キット」ですね。

SIAF2024では『WIRED』日本版のポッドキャスト「SIAF AS A TOOL」を開設し、インタビューを公開収録・配信しています。ゲストにパノラマティクスの齋藤さんやSIAFラボの皆さん、木ノ下さんなど、今日登壇された方を含めて多くの方に登場いただき、未来を拡張するツールとしてのアートやテクノロジーの可能性を探っています。

木ノ下:実は「LAST SNOW」につながっている『WIRED』日本版の「AS A TOOL」特集。2階SCARTSスタジオに展示しているので、ぜひご覧になってみてください。

※1　坂本龍一＋真鍋大度「センシング・ストリームズ - 不可視、不可聴」。2014年7月19日～9月28日、札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）での展覧会「センシング・ストリームズ」において、空間に流れる不可視・不可聴データを真鍋大度が可視（映像）化、坂本龍一が可聴（音楽）化し、モエレ沼公園内のガラスのピラミッドに特設された巨大ビジョンに映し出した。

※2　2001年9月11日、イスラム過激派テロ組織アルカイダによって行われたアメリカ同時多発テロ事件。

※3　高架鉄道路線跡を利用した全長2.3kmの空中公園。

※4　奈良県・奥大和を舞台にした芸術祭。コロナ禍における観光復興の一環として2020年から毎年実施し、2023年は9月16日～11月12日に「Competency（能力）」をテーマに開催された。

※5　横須賀の無人島・猿島を舞台にした芸術祭。2019～2022年に3回実施し、2023年は初のリサーチイヤーとして12月に開催された。

※6　『WIRED』は1993年に米国で創刊し、英語圏、スペイン語圏、中東、アジアで展開するテックカルチャーメディア。

※7　2022年6月13日発売の雑誌『WIRED』日本版VOL.45「AS A TOOL:気候危機を生き抜くツールカタログ」。『WIRED』日本版が考える2020年代の思想とライフスタイルを凝縮した全180のツールを紹介した。

SIAFラボのメンバーは「永遠の中2」!?

小町谷圭（以下、小町谷）：小町谷です。SIAFラボのメンバーはSIAF初年度に、坂本龍一さんの作品を札幌市内でランニングするためのチームとして集められたのですが、終了後、「3年後に向けて僕らはどんなことを考えたらいいだろう？」「地域で芸術祭を行う意義を自分たちも考える必要があるのでは」と思い、実行委員会と相談した上で、SIAFを開催していない期間も「都市と自然」をベースに札幌市資料館を拠点に活動することになったという経緯があります。

SIAFラボのメンバーは、パノラマティクスや（小川秀明氏が共同代表の）アルスエレクトロニカ・フューチャーラボのような大規模なメンバーではなく、（大学講師、アーティストやウェブ開発など）地元で仕事をしている4人で、プロジェクトごとに地域の人材に協力を求めています。また、スーパーバイザーとして久保田さん（※8）に加わっていただき（木ノ下：今日会場にお越しになっています）、色々とアドバイスをもらっています。本祭とSIAFラボの共同的な活動の在り方については毎年議論しており、今回のSIAF2024終了後も改めて考えていきます。

木ノ下：芸術祭は、2年や3年、4年、場合によっては5年など、期間を空けて大イベントを開催するケースが多いのですが、端境期をどう過ごすかは課題の一つです。そういう意味では、SIAFラボは「冬」をテーマに、札幌の都市としての象徴となるようなものを独自の観点でリサーチし、作品化されてきましたね。

小町谷：はい。発端は、坂本さんがディレクターを務めたSIAF2014で、雪の結晶の研究家・中谷宇吉郎さん（※9）が携わった科学映画や研究資料などが展示されたことです。これは、2013年に札幌市がユネスコ創造都市ネットワーク（※10、以下・UCCN）への加盟が認定され、「北海道らしいメディアアーツとは何だろう」という観点から、中谷さんの業績と、娘で“メディアアートの母”ともされる中谷芙二子さん（※11）について紐解くことになったそうです。

北海道は、夏は非常に過ごしやすいのですが、「都市と自然」について考えた時、自然の介入が避けられない冬にこそ札幌らしさが出てくるのではと考え、9年間ずっと「冬」をテーマに活動してきました。そうした中、SCARTSとは開館の2018年から、除雪・排雪といった北国特有の都市機能を美術の側から見る取り組みを共同で続けています。今回はここ5年間の取り組みを、パノラマティクスのプレゼンテーションとリンクさせながら展示しています。

木ノ下：（SIAFラボの）お二人も一言ずつどうぞ。

船戸大輔（以下、船戸）：「冬」の活動につながる出来事で私が覚えている話をご紹介します。SIAF2014が終わり、SIAFラボとして「都市と自然」を掘り下げるための議論を交わした時のことです。当時、北海道に移り住んで3年目の小町谷さんが「北海道で経験した雪の壮大さ、偉大さが印象的だった」という話をされたことをきっかけに生まれたのが「さっぽろ垂氷（たるひ）まつり」（※12）。「透明なつららをどうスキャンする？」という話からメディア展開を考えたり、回転式の巨大造成マシンでトゲトゲの人工つららを作ってみたり…。どんどん表現が広がり、今に繋がっていることを実感します。

石田勝也（以下、石田）：UCCNの話題で「メディアアーツ」という言葉が出てきました。これは僕個人の感想で、きちんと話し合ったことはないのですが、メンバーの共通感覚として「都市そのもの＝メディア」として捉えている気がします。雪や氷、都市に起こる気象現象、建築そのものの様態など全てをメディアとして捉え、僕らが切り取れる方法を模索している。とはいえ、きっかけは、ものすごくシンプル。「つららを題材になにかやろう！」となった時、今でも僕は覚えているのですが、船戸君は「スキャンしたい」、小町谷さんは「曲げたい」と言ったんです（笑）。それって、僕からすると「面白いからやってみようぜ！」という中学校2年生的なアイデア（笑）。でも現実的にやってみて、結果的に都市や環境を考えることにつながっている。というわけで、僕はSIAFラボのメンバーは“永遠の中2”だと思います（笑）。

小町谷：小2と言っても…（笑）。

木ノ下：（笑）「メディア」とは「情報」だけではなく、「媒介」という意味が本来あります。展覧会もメディアだし、皆さんの活動もメディア。ただ、きっかけとして「なんだこりゃ」というようなことを続けることが、アーティストやクリエイターが都市計画に関与する可能性といえるでしょう。齋藤さんのおっしゃる建築家の功罪などはあるものの、SIAF2024はそうした社会実験も含めて存在意義があると思います。雪まつりの始まりも、ごくシンプルな初期動機からと聞きました。齋藤さん、お話いただけますか。

※8　多摩美術大学教授、アーティストの久保田晃弘氏。

※9　1900-1962、北海道帝国大学（現北海道大学）における雪の研究と人工雪製作で知られる実験物理学者。

※10　創造的・文化的な産業の育成、強化によって都市の活性化を目指す世界の都市が国際的な連携・相互交流を行うことを支援するため、2004年にユネスコが創設したネットワーク。札幌市は世界で2都市目、アジアでは初めて「メディアアーツ都市」としての加盟が認定された。

※11　「霧の彫刻」で知られるアーティスト。ビデオアートの制作や若手の発掘・支援にも尽力した。

※12　「垂氷」とは「つらら」の古語名で、身近なつららを切り口にアートやサイエンス、人の営みや記憶など多様な視点から札幌の冬を再発見するイベント。2016〜2020年、さっぽろ雪まつりと同時期に開催された。

雪まつりの意外な原点と、現状に対する「不思議」

齋藤：はい。そもそも僕が（SIAF2024ディレクター）小川さんから「雪まつりの中で何か作品を作ってほしい」と言われた時、「雪まつりという特殊で厳しい環境の中で芸術祭をやるのは面白いな」と感じました。雪まつりの発端について河村君に調べてもらったところ、「こんな現象から始まったんだ!」という驚きがありました。

河村：雪まつりの始まりは1950年の冬、中高生たちが「雪が余っているなら何か作ろう!」と自発的に雪像を作ったことにさかのぼります。その後、女子高校生が参加するなど、市民全体のお祭りと化していき、規模が大きくなり、1955年からは陸上自衛隊も参画しています。1990年代になるとインターネットで発信したりと、その規模はどんどん広がっていきました。雪まつりの根源が、余った雪を自分たちが楽しむ、いわば“遊び”のために使ったことは、道普請（※13）のような昔の町作りにも通じるところがあり、面白いトレンドだと感じます。

齋藤：僕たちは雪まつり会場で「とある未来の雪のまち」の実証実験を行っています。今までテレビのニュースなどでイベントのことを知ってはいましたけれど、今回初めて観光客でにぎわう会場の雰囲気に触れ、他のエリアも色々と歩いてみたのですが…。これは言ったら怒られるかもしれないですが、「雪まつりって、消費される媒体になったなぁ」と思いました。

今や大量生産・大量消費の時代ではなく、サスティナビリティ（＝持続可能性）やサーキュラリティ（＝循環性）を実装するフェーズにあります。それなのに「雪はきれいでなければ!」と、真っ白い雪をわざわざ別の場所から運んできたりしていることが、僕には不思議に思えました。それはそれで一つの文化かもしれませんが、要は消費の対象になってしまったということでしょう。バブル期には「観光でどれだけ地元経済を回すか」という話だったかもしれませんが、それをいったん巻き戻さなければいけない時代にきているのではないでしょうか。

木ノ下：「消費」というキーワードが出ました。芸術祭も昨今そういう傾向が若干ある気がします。そうではない試みとして、SCARTSではアーティストによるリサーチ結果を見せると同時に、そのプロセスに何を考え、どうアクションするのかについても、真摯に向き合っているといえます。『WIRED』日本版の松島さんはさまざまな研究者へのインタビューをされていますね。

松島：そうですね。僕が『WIRED』日本版で一番最初に特集した「NEW ECONOMY（ニューエコノミー）」（※14）を引き合いに考えてみると、たとえば、これまでの、物理的なモノをやりとりする実体経済では「希少性」が

価値となったけれど、デジタルになった途端、1億人とでもシェアできる。このデジタル経済のロジック(=論法)は、「その潤沢さにどう価値を見出すのか」にあって、本当はデジタルが普及した今、社会はそちらの方向に変わっていかなければならないはず。
SCARTSも、札幌のここにしかないことに希少さがあるんだけれど、デジタルとフィジカルの重なり合い、建築物とデジタル情報の重ね合わせの先に、そうした潤沢さの中に芸術祭を改めて捉えられることが、SIAFの可能性ではないでしょうか。

木ノ下:私たちはコロナのパンデミック、各所での地震を経験し、「地球は私たちだけのものではない」ことを思い知らされたわけです。災害と共にある中で、人間は抗いながら、地中の熱を温泉に変えたり、地球の営みを私たちのテクノロジー、技術・知恵によって変換してきた。その一方、"遊び"によって芸術祭を生み出す私たちの感性と知性は、まだまだ捨てたものではなく…SIAFをご覧になって「なぜこんなものを作るんだろう?」と思われた方もいるかもしれません。「どうしてつららをスキャンしたの?」とか、正直ワケわからないですよね(笑)。けれど「なぜこんなことを?」という人が大人になり続けて、それを社会が良しとする。だって、つららをつくった皆さんは大学の先生なんですよ!(一同笑)。でもそれこそが、だからこそ、私は良いのではと思うんです。それが、まだできているという意味での豊かさ、許容すること。そういう意味では、奈良県「MIND TRAIL」の話は心が痛いです。

※13　自分たちの道は自分たちで守るのが当然として、道路清掃や草刈り、補修などを行う昔ながらの自主的ボランティア活動のこと。
※14　2018年11月13日発売の雑誌『WIRED』日本版VOL.31「NEW ECONOMY ぼくらは地球をこうアップデートする」。現在のプラットフォーム資本主義やデータ資本主義をどうアップデートできるのかを考察した。

肌感覚では捉えられない「除雪」を可視化する

齋藤:"遊び"はすごく大事で。街づくりに関わるコンサルティング会社や行政の論理は「1が2に、2が3になる」という積み上げです。でも、アーティストのロジックは、1がたまに7まで飛びます(笑)。飛んで、「あれ?やっぱり違った」と、2に戻ったりするんですね。アーティストの考え方、芸術祭の役割とは、一般的ロジックの線とは全く違うところに点を打つこと。芸術祭の面白さは、僕も含め外部アーティストが、その土地の事情も環境も歴史も分からないまま入ってきて「なぜ、やらないんですか?」と問うことにもあると思います。

木ノ下:世の中には事業計画書なるものがあり(笑)、何かに取り組むときには目標設定があるわけです。けれど、芸術祭が目指すものは、もちろん数字も大切ですけれど、1人1人の心に「何かが刺さった」「後ろ髪を引かれた」など、余韻や疑問、問いを残すことかもしれません。「分かっていることが正しい」という危険な状況に世の中がなりつつあった中、パンデミックなどを経験し、私たちはじっと考え、見えてきたこともあるはずです。

小町谷:僕はもともと東京で非常勤講師などをしていたのですが、東日本大震災が起きて、被災者の方と知り合い、福島で起こったこと、東京に送られてきた電力を使って僕が作品を作っていた状況を知った時に、「東京中心の都市構造がこれからは違う形になるのでは」と感じて札幌に引っ越してきました。札幌での生活は非常に新鮮で、たとえば東京で見る雪と札幌で見る雪は全く違う。黒い服に雪が舞い落ちると、六角形の雪の結晶が目視できることに驚くなど(笑)、自分にとっての「当たり前」が変わりました。もちろん良いことばかりでなく、出勤前には除雪作業があったりするわけですが(笑)。そうした経験を経て「これほど自然が猛威を振るうエリアで、こんなに大都市機能を持っていること。ササラ電車やロータリ除雪車など独自の仕組みで都市全体を除雪するとはどういうことなんだろう?」と疑問に思ったのが、個人的な動機です。

そうして調べてみると、約2千台の除雪車が一夜に札幌市内を除雪していた。それは、自分の肌感覚や体験としてはなかなか得られないもので、データを使って見聞きできたら面白いのでは…と始めたのが、SCARTSとの取り組みにつながっています。

船戸：今回は毎年恒例になっている、除雪車に搭載されたGPSによる位置データを可視化した《除雪車のGPS測位データと地形データでみる大雪のまち》などを展示しています。雪が降った日の夜は、ものすごい台数の除雪車がわーっと一斉に動くのが軌跡として浮かび上がってきます。ただ、札幌市雪対策室の方が「理解されない」「喜ばれることがない」と話されたのが印象に残っています。ある意味インフラとして確立されているからこそ、そう言われてしまうのかもしれませんが…。実際、GPSデータを可視化すると、ちゃんと札幌の地図に見えるんです！僕は北海道に住んで約40年ですが、こうやってデータを俯瞰して可視化することで発見があって面白いです。

石田：私は「除雪彫刻」（※15）の話をします。中谷宇吉郎さんは「雪は天から送られた手紙」とおっしゃいた通り、雪をメディアとして受け止めたのでしょう。でも、それが降り積もって生活現場に入ると、非常に厄介です。でも、雪は1度たりとも同じ形にはなりません。かつ、昨日あったものが今日同じ状態になっていることも、ほぼないんです。これは、都市に介入する自然のある種の不思議さで、それが日々積まれて身近にあるのですが、僕たちは「不思議だ」とは全く感じないわけです。ですから、写真のように留め、その場所にあった雪がどんなものだったのかを見返すことで、我々の都市像や生活環境について把握できるものはないかと考えています。

除雪彫刻はまた、その季節のログ（＝記録）ともいえます。ログを留めることは、形や体感としてフィジカルに感じることにつながります。フィジカルに感じる中に、本質的なことがあるのではないか。手前味噌ですけれど、除雪彫刻はまさに、それを体現しています。雪山をスキャンしただけのものですが、ボンと置かれることによって見る人は何かを感じる。何を感じるかは人それぞれですが…うん、SIAFラボ、すごい！（SIAFラボメンバー笑）。

木ノ下：自画自賛ですね（笑）。『WIRED』の松島さん、いかがですか。

松島：強引に話を繋げるようですが（笑）、スチュアート・ブランドは『WEC』を作る前の1960年代、NASAに「全球写真」の公開を求めたことでも知られています。「人類はやっと宇宙に行ったのだから、地球の写真があるはずだ！」と。結果、NASAが公開し、人類は初めて地球の写真を見ることができました。今となったら信じられませんが、つい最近まで、地球の写真を誰も目にしたことがなかったんです。概観効果（オーバービュー・エフェクト）（※16）と言われるんですが、人類が2度と戻れないぐらいの概念の変換が起きたんです。ですから、今の話にあった除雪マップも、今まで誰も見たことがなかったけれど、一度見てしまうと、札幌の都市を、たとえば雪が降ると出てくる虫のように、一つの生態系のように全てが動いているという感覚で捉えることができる貴重な瞬間を生んだのかもしれません。

※15　積雪という自然現象と除雪という都市機能の間に生まれた雪の形状を3Dスキャンしたもの。
※16　宇宙から美しい地球を見下ろす体験を経て、宇宙飛行士の世界に対する見方や考え方ががらりと変わること。

雪まつりの「実験区」で提案したこと

木ノ下：表現によって知らされること、ビジュアル情報における受け取り方について話がありました。河村さんは札幌の都市についてリサーチされ、都市の変化や特徴をどうお感じですか。

河村：札幌の大きな特徴は、190万人超も住む大都市にも関わらず、非常に積雪量が多いことが挙げられます。SCARTS会場では、札幌と同緯度の世界の雪の都市に関するリサーチ結果を展示していますが、札幌市の降雪量が年間平均約480cmなのに対し、たとえばヨーロッパは40cm程度。「こんなに雪が大量に降る場所に、なぜ人が住めるのか？」という問いについては、やはり除雪のテクノロジーなどが大きく影響しています。
さらに、雪をエネルギーとして使おうという動きも特徴的です。たとえば、施設に雪を貯めて夏は冷房にしたり、野菜の保存にも活用して味も良くなるというメリットを見つけたりしています。北海道に暮らしてきた人たちが培ってきた技術が、札幌では大都市ならではの形で消化しているといえます。

木ノ下：ちなみに、河村さんのご出身は？

河村：遠軽町という、オホーツク海側の町です。

木ノ下：プロジェクトに参加して、何か気づきはありましたか？

河村：実は、遠軽町の方が札幌より降雪量は多いんです。ですが、交通網がこれだけ発達している中にこれだけ雪があるのは、同じ道内でも体験としては全く別物でした。皆が寝静まった後、夜中に除雪車がシステマチックに動いていたり、排雪場が別の場所にあったりするなどのシステムは、僕の地元ではあまりなかったように感じます。地下が発達していることは、グリッド（＝格子）都市ならではの面白さですね。地上には人がいないのに地下では多くの人が行き交う光景は、北海道の中でも札幌特有の現象といえます。

木ノ下：齋藤さん、芸術祭と都市論との関係について一言いただけますか。

斎藤：僕のチームは都市計画や都市景観条例などにも関わっており、今も東京の町全体を研究しながら見ているのですが、そうしているうちに疑問に思ったのがエネルギーの話です。先ほど小町谷さんもおっしゃっていたように「この電気は、水はどこから来ているんだろう？」「自分が食べているものは何なんだろう？」みたいなことですね。東日本大震災が起きて色々な議論が起こり、皆さんも注意が向いたと思います。

そこで、そもそも僕は、都市論が変わっていかなければならないと考えています。大都市の考え方は残酷です。要するに、面倒くさいものを入れたくないんですね。

テクノロジーに関して、たとえば、僕は冬の札幌に来て「雪道で車ってこんなに早く走れたかな？」と疑問に思いました。昔はタイヤにチェーンを付けてガチャガチャしながらゆっくり走っていたはず。それが今や、他の季節とほぼ変わらないスピードで走っている。ここ十数年におけるタイヤや路面におけるテクノロジーの進化はすごい。そうした身近なことを含めて、要は、思想を持っているとその方向に進んでいく現象がたくさんあると思うのです。

都市論についても、密集型ではなく、分散型があるのではないでしょうか。僕が影響を受けたのは、アメリカで手にした『WIRED』マガジンの「Go Nuclear」という特集です（※17）。福島第一原発事故が起きる前のことでしたけれど、要は「エネルギーを発電する場所、資源を作っている場所の周りに住もう」という考え方が紹介されていました。随分ラディカル（＝過激、急進的）な意見といえますが、「確かにそういうこともあるのかな」と受け止めました。

今の時代、大きなネットワークの中ではなく、自分たち単体で発電する、食べ物を作る、家を作る資材をまかなうことは可能です。もちろん、そこだけで閉じるのではなく、ないものは持ってくればいい。そうしたグリッドから外れた街の在り方、「オフグリッド（＝この場所でさまざまなものが生産され消費する営み）」がこれからの都市の在り方として実装できるのではないかと考え、雪まつり会場では「オフグリッドシティ」を提案する公開実験をしました。今までの都市論、最初の田園都市論について、河村君に説明してもらいます。

河村：田園都市論は1898年に提唱された考え（※18）ですが、当時は産業がどんどん盛んになる中、産業と住宅地がどう共存できるかという時代でした。でも1970年頃になると「本当に工場と住宅だけ見ていていいの？」という議論も起き、自然と人との関わりに目が向くようになります。また、ジェントリフィケーション（＝都市の富裕化・高級化現象）という格差問題も指摘されます。そうした現象に対し、近年はボトムアップ的に市民が街づくりに参画する動きが出ています。自分達で都市をハックする（＝既成概念を打ち砕く）、例えば、空き地でなにかアクションを起こすなど、そこから都市作りを始めようという動きです。都市論も、産業がどんどん生まれた時代とは意味合いが変わってくるわけです。自然との共生や、人々のもとに都市を取り返そうみたいな形ですね。都市論は今、変化している最中といえます。

齋藤：一つ補足を。かといって、「今の札幌の都市を細分化して小さくしましょう」ということではありません。分散と集中、僕は両方混在すべきだと思います。集中しているからこそ都市として機能する場合もあるし、コロナで当たり前になったテレワーク、二拠点生活なども可能になっている。もっと自由になっていいという立場です。自由＝選択肢があることですので、細分化して否定したいわけではありません。

僕は過疎地の「地方」という言い方も好きではありません。それは一つのローカルであって、それぞれの地域やコミュニティをリスペクトしながら作っていきたい。今年は元旦から能登半島地震が起きました。災害が起きた後の都市計画についても、1995年の阪神・淡路大震災の時から議論が続いています。広がり続けた都市や住宅地、工業から人がどんどんいなくなり、歯抜けた場所が火事などの被害に遭うケースが、悲しいけれど起きている。次に取り組むべきは、小さな都市計画ではないでしょうか。大きな気候変動が起こる今、「安全に住める場所」が大きなディスカッションであり、今回はそれを含めた都市論を提案しています。

※17　2005年6月1日発売のアメリカ版『WIRED』。「Go Nuclear」を直訳すると「核に行こう」。
※18　イギリスのエベネザー・ハワードが提唱した都市形態。その後の都市計画に多大な影響を与えた。

FUTUREに「s」をつけて。札幌の未来を考える

木ノ下：都市論や経済に関して、松島さんはいかがでしょうか。

松島：都市論は齋藤さんがご専門ですけれど、お話を伺っていて思ったのが、つい最近、芥川賞を受賞した『東京都同情塔』のことです。芥川賞史上初めて、ChatGPTを使って書かれた小説で、主人公が建築家なんです。本筋とは関係ないのですが、「建築家は未来を見ることができる人種だ。作ったものは今着工すれば50年後にもどかんとある。当然ながら、建物が出来た後のことまで分かってなければ、建築家なんてなれない」というようなセリフがあって、「そうだよな」と深く共感しました。つまり、都市論は未来論と密接に関わっているわけです。

先日のイベント「WIRED Futures」(※19)をはじめ、『WIRED』日本版は「Futures(フューチャーズ)」という言葉をよく使います。意味するところは「多元的な未来」。FUTUREは普通、単数形で使われますが、最後に「s」をつけています。

『WIRED』日本版で「Next Mid-Century」という特集も組みました(※20)。単数形の未来は何かというと、皆さん、1950年代を思い浮かべてください。当時の「未来」とは、ロボットや自動運転車、空飛ぶタクシーや火星探査などではないでしょうか。ただ、それらは西欧社会の、言ってしまえば白人の男性で、科学者をはじめとしたインテリ層の人たちが描いた未来です。そうした「20世紀の未来」の中にまだ私たちは生きているとも言えそうです。

だとすれば、「Next Mid-Century」＝30年後の2050年代はどうあるべきなのでしょうか。世界に目を向けると、アフロフューチャリズム(＝アフリカ未来主義)、ガルフフューチャリズム(＝湾岸未来主義)、サイノフューチャリズム(＝中華未来主義)、ジェンダーなど様々な思想があります。こうした「多元的な未来」を考えることは、世界の潮流です。

今回札幌を訪れ、「どう考えても、東京の未来と札幌の未来は全然違う」と再認識しました。今までの都市論は、もしかすると西洋目線で、これから齋藤さんたちはじめ、ここから出していかないといけない。FUTUREを

FUTURE「S」にしていく時、どこを起点にするのか。それはたぶんローカリティ、ヴァナキュラー(=風土的)なローカリティが大切だと思います。

木ノ下：ありがとうございます。都市論と言っても一つではなく、多元的なんですね。と同時に、地球規模の観点もないと困るわけです。そう考えた時、札幌市がなぜ、UCCN加盟を目指したのか、腑に落ちる気がします。もちろん、実務レベルの事情もあると思いますけれど(笑)。この環境と向き合おうとした時、見えないテクノロジーがこの都市を成立させていることを思うと、「メディアアーツ都市」とは言い得て妙だと感じます。

※19　2023年12月8日、東京で開催された『WIRED』日本版が主催する年1度の大型カンファレンス。
※20　2023年9月21日発売の雑誌『WIRED』日本版VOL.50「Next Mid-Century:2050年、多元的な未来へ」。「30年後は2050年代――つまりはミッドセンチュリーとなる」ことを踏まえ、「30年後の未来」の様相を空想の泰斗・SF作家たちとともに空想した。

芸術祭は「溶けてなくなればいい」

木ノ下：ご質問やご意見を受けたいのですが、いかがでしょう？ SIAFラボ スーパーバイザーの久保田晃弘さんがいらっしゃいますので、質問をお願いしたいと思います。無茶ぶりですみません。

久保田晃弘：久保田です。小町谷さんのご紹介通り、SIAFラボができる2015年に声を掛けていただいて以来関わり、2017年にはモエレ沼公園で展示もしました(※21)。僕はSIAFのコミッティメンバーですので、今後SIAFをどうすることが、札幌にとって、あるいはもっと広い視点で大事なのか伺いたいです。

齋藤：僕は常々、芸術祭は溶けてなくなればいいと思っています。芸術祭は外部の目を取り込む良い機会なのですが、3年に一度って結構きつい。ノウハウの蓄積が一つの課題です。

僕はアートとデザインの境がない人間で、地域デザインに近い活動も多い。「除雪」をテーマにした展示のように、3年に一度の芸術祭が、行政の関係各課やNPO、NGOの活動の羅針盤を合わせる良い機会になると思います。市民がちゃんと参加できる場所が3年に一度フェスティバルとして訪れる。その中間チェックポイントとして、SIAFラボが、冬なのか、年数回なのか、こういうトークなのか、形態は分かりませんが、継続していかないといけないと思います。

もう一つ。SIAFは「人」が集まる貴重な場でもあります。たとえば彼女、木ノ下さんがここにいること自体、僕はすごいと思う(木ノ下：いえいえ!)。でも、続けるためには経済性も持たなければならない。言い方は悪いですが、市の予算や民間の財源を取ってくる人や、行政的な事情も理解でき、民間とも話せる人が伴走しないと、どこかでコケてしまいます。芸術祭は、やめた瞬間ゼロに戻る。札幌市がUCCNに認定されたことは良いきっかけです。芸術祭で羅針盤を合わせ、アウトプットも通年できるとうまくいくのではないでしょうか。

木ノ下：芸術祭初参加の松島さん、いかがですか。

松島：「実装する」は重要なキーワードだと考えます。今回、ヒデさんのディレクションで思索的な問いが投げ掛けられ、齋藤さんは雪まつり会場の「実験区」で「オフグリッドシティ」を実際に見える形で展開されました。僕のポッドキャストも含め、芸術祭全体にジェネラティブ（＝生成的）な仕掛けがあり、双方向が生み出されていました。これが続いたときに何が生まれるのか楽しみです。ここからさらにSIAFラボが引き続き強度を高めていけば、「あそこで変わったね、SIAF」となるように思います。ただ、振り返ってそれがわかるのは3カ月後ではなく、3年後など少し先になるかもしれませんが…。

木ノ下：SIAFラボの皆さん、いかがでしょう。

小町谷：こういう外側の視点からアドバイスいただける機会がまずありがたいです。また、雪まつりが始まったきっかけが、「雪」をクリエイティブな資源として使おうという発想の転換にあったという話がありました。近年の温暖化・気候変動といった問題も抱えながら、今後どう続けていくのかという状況に、今あるのだと感じました。そして、自然発生的に生まれたものとは真逆の都市計画については、どうやって継続的に適正な規模を維持しながら続けていけるのか。ただ小さくやれば良いのか、あるいはどんどん膨らみ続けることが正解なのか？いつかは終わりを迎えるかもしれませんが、その時何が残っていたらいいのか。改めて考えていかないといけないと思います。

石田：僕はSIAFが始まる前、札幌市に「創造都市さっぽろ」を提言する第三者機関メンバーの一人でした。「札幌の街におけるメディアアーツとは何か」という定義を考えた時、武邑光裕先生（※22）から伺った「メディアートではなくメディアアーツなのだ」という話がありました。なぜ複数形なのか。それは、根本が「ユーザー・ジェネレーテッド・シティ」だからです。

雪まつり同様、YOSAKOIソーラン祭りも、北大の学生が始めたことはご存じでしょうか。初音ミク（※23）に代表されるボーカロイド文化も、ユーザー・ジェネレーテッドなカルチャーなんですね。というわけで、SIAFを単体で見た時は、確かに経済などが関係しますが、創造都市という観点からすると、ユーザー・ジェネレーテッドなものの一つとしてあるといえる。札幌のメディアアーツは市民が作り上げてきたもの。ですから、継続性の担保と同時に、札幌に住む方たちが「自分たちの手で作っている」という実感を持てるかという規模感も検討課題です。雪まつりは、その実感をどこかで手放してしまった気がします。

河村：僕はシビックプライド（＝都市に対する市民の誇り）が上がるきっかけになることを期待しています。アートに携わることで「実は札幌ってこうだったんだ」と自分のまちの良さを再発見し、どんどん好きになる。それは、やがてアクションを起こす動機付けになる可能性を生みます。たとえSIAFがなくなっても、「ならば自分たちは何できるのだろう」という動きが生まれるきっかけになればと思います。

齋藤：僕にとって芸術祭の良いところは、コミュニティができること。たとえば、今日も朝から宿泊先のサウナで同じく宿泊しているアーティストの脇田さん（※24）に「いや〜齋藤さん…」と話しかけられました（笑）。そういうふうに線が交差することって、面白い。しかも、芸術祭は「説明コスト」がかからないのも良い点です。詳しい説明をすっ飛ばして「札幌でこの時期、雪をテーマにアーティストが何をやったらいいのか？」から議論を始められますよね。

※21　モエレ沼公園を会場に、成層圏気球によって宇宙とつなぎ、まだ見ぬ地球外知性に思いを馳せる「宇宙の彫刻」を市民テクノロジーで実現するARTSATとのコラボレーションプロジェクト「Space-Moere（宇宙モエレ）プロジェクト」。SIAF2017での展示を経て、韓国やポーランドの国際展に出展。2018年には、作品《全知性のための彫刻》が第21回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品に選出された。

※22　1954年東京都生まれのメディア美学者。

※23　歌声合成技術を用いて、札幌のクリプトン・フューチャー・メディア株式会社が開発したバーチャルシンガー。

※24　SIAF2024・モエレ沼公園会場参加アーティストの脇田玲氏。サイエンティスト、慶應義塾大学環境情報学部教授。

テクノダイバーシティを起点に。SIAFの地層を掘り下げる

齋藤：北海道の建築に関して、SIAFラボチームに質問してもいいですか？札幌でも北大の先生やローカルの建築家の方たちがデザインすることが多いじゃないですか。僕も最近、北大の先生が手掛けた東川町の学校を見させていただきました。デザインのイニシアチブ（＝主導権）をローカルに戻すことも僕は大事だと思っていて。そういう意味では、SIAFラボがそういう存在になるのではと思っています。いかがでしょう。

石田：確かに、寒冷地には寒冷地の住宅テクノロジーやノウハウがあって、実際に地元に住んでいる建築家は強いですよね。耐荷重に関する技術的な話も、降雪地帯は変わるでしょうし。「テクノダイバーシティ」という言葉がありますけれど、「もっとローカルであって良いのでは？」と思うほど、建築分野でも地域ごとの意匠や技術的ノウハウは間違いなくあります。

齋藤：テクノダイバーシティというキーワードが出たので、松島さんに振ります（笑）。

松島：ありがとうございます。『WIRED』日本版の「Next Mid-Century」特集で、「2050年の未来を考えるときに大切なのはテクノダイバーシティだろう」と、香港出身の気鋭の哲学者ユク・ホイさんに語っていただき、齋藤さんとも対談していただきました。
テクノダイバーシティを、ユク・ホイは「多元性技術」と言っています。多元性って、多様性とどう違うのかというと、多様性とは「今同じ場所にいるんだけれど、みんな違う」。対して、多元性は「そもそも自然の気候も世界観も世界各地で全然違う。とすると、生まれてくるテクノロジーも、全く別ものであり得るよね」ということだと思います。テクノロジーで世界が一つになる良さもあるし、その反面、世界が技術的にノーマライズ（＝標準化）されてしまうネガティブな面もあって。どちらかというと、この100〜150年、人類は頑張ってノーマライゼーションをやり遂げ、おかげで人生は楽になり、雪道も気持ちよくクルマで走れるようになったんですけれど、そこで失われた技術、多様性はある。そうしたことを再考するタイミングではないかと、そんな風に僕は理解しました。

齋藤：ユク・ホイは今大注目の哲学者ですが、インタビューさせていただいた時、「あなた自身は山を歩くのか？」という質問に「はい、普通に歩きます」と返答されたのが印象的でした。というのも、今までの哲学は、どちらかというと形而上学的なものが多かった。それこそ、ライゾマティクスの名の元にもなっている『千のプラトー』を作ったジル・ドゥルーズ（※25）など。それに対して、「アントロポセン」（※26）という言葉がコロナ前から言われるように、地層学的にはもう新しいレイヤーが始まっています。
今の哲学の文脈の中でも、もっと“地層”を調べていきたい。たとえば、札幌で芸術祭をやることの意味をぐっと掘り下げた時、初めて見えてくるものもたくさんあるはずです。そもそもテクノロジーは、まずはユニバーサルに、誰でもどこでも使えるフォーマットを求めてきました。それはそれで大事なフェーズだったんですが、これからは「寒冷地だからこの素材、建て方、使い方」みたいな面にもっと注目が集まるべき。デザインやアートの人間も、そういう方向に進む社会的役割を担っているのではないかと感じています。

※25　1925-1995、フランスのポストモダニズムの哲学者。

※26　ノーベル化学賞受賞者のドイツ人化学者パウル・クルッツェンとアメリカ人生態学者ユージン・ストーマーが提唱した「人類の時代」という意味の新しい時代区分。「人新世（じんしんせい）」とも言われる。人類が地球の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになった時代であり、現在＝「完新世（かんしんせい）」の次の地質時代を表す。

函館から見たSIAF。観客が受け取った、小川さんのメッセージ

木ノ下：事前にいただいたご質問です。「札幌は北海道の中心にありながら自然にあまり開かれていない印象がありますが、どうお感じですか？ たとえば、飲料水の生産工場と地元高校の間には川が流れていますが、数年前に訪れた時は人間から打ち捨てられたような印象がありました。自然の真っただ中にある街だからこそ、もったいなく残念に思います」…お書きになった方は？(1人挙手)ありがとうございます！

質問者1：質問を書く時に「都市と自然」のコンセプトをよく理解していなかったので、今の質問はトーク内容には当たらないかもしれません(笑)。今日、私は函館から来ましたが、新千歳から移動する間、ヨーロッパの風景とは違い、都市に皆集まり、自然豊かなところには住まない。そういう都市性に対する批判精神みたいなものは、特に日本の場合、芸術祭の中で綿々とあるのかなと思って聞いていました。

木ノ下：もうワンテーマできそうな感じですね。確かに都市に様々なものが集中しており、その再生を目的とした芸術祭も国内外に多くあります。

質問者1：SIAFが北海道をどれだけ代弁すべきか、あるいは、札幌という特殊性に突出して良いのか、迷いがあるように見受けられるんです。道南・函館から見るとやっぱり違和感がある、「それは東京じゃん」みたいな(笑)。先ほどの建築の話でも、確かに北海道には独特な文化がありますが、そういうことを考え始めると縛られるじゃないですか。だから、そこはどうなのかな？と思ったり。道南にも道央にも、ユニークな小規模の芸術祭があるんです。でも、それらは土着的・民俗的なので、SIAFが掲げる都市性とは相当解離がある。どう進むべきなんだろうな…と思いながら見ています。

木ノ下：貴重なご意見、ありがとうございます。

質問者2：SIAF2024の展示を色々見させていただいて、ディレクター・小川さんのメッセージに通底するものを「消費から一歩踏み出して当事者になれ、主体になれ、クリエイターになれよ」だと、私は受け止めました。齋藤さんの「雪まつりは消費の場になった」というコメントもありましたね。それで、「消費」という文脈でSIAFを捉えた時、我々が見るのは完成形なんです。アーティストが持ってきた完成形を見せられて、「面白い」「すごい」で終わっちゃう。それ、すごくもったいないと思います。今回、参加型プログラムがあるとは思いますけれど、上から「やりましょう」の形であって、ボトムアップではない気がします。提案したいのは、たとえば、学校祭や学園祭、体育大会などの中に「メディアアートのような表現方法を取り入れませんか？」などと声を掛けてみること。インスパイアされるのではないでしょうか。

木ノ下：確かに、次の芸術祭の一つの可能性になるかもしれません。登壇者の皆さんから、最後にメッセージをいただきます。

展示は「未完成」？都市を作るのは誰なのか

齋藤：今いただいたコメント、すごく大事だと思います。芸術って磁石みたいなもので、ほかの取り組みがバチバチついてくるはずなんです。「東京クリエイティブサロン」（※27）を開催して6年目ですが、プラットフォームを用意すると、比較的繋がりやすい印象があります。あと、学生への提案では、雪まつりの他のコンテンツと絡めて「もっとアップデートできるのでは？」というディスカッションをしても良いのではないでしょうか。でも、こういうことをSIAFラボの方たちが言うと「ややこしい人たちがいる…」となるかもしれないので（笑）、僕たちのような外部の人間がどんどん発言し、カンファレンスできる場が今後もあるといいなと思います。

河村：北海道としての土着性、札幌としての文脈は、リサーチを通してとても深いと感じました。明治以前・以降によっても大きく変わると思いますが。そういう側面とどう向き合うか、こういう場だからこそ、もう一度定義し直すことも、可能性の一つだと思います。

松島：「都市と自然」はもう1時間やりたいテーマなので、また別の機会にお願いします（笑）。ポッドキャスト企画で感じたのが、アーティストの方々は、作品を鑑賞しただけでは分からない、全く違うコンテクストをたくさんお持ちだということ。ですから、ちゃんと話してもらい、文字や文章で残すことも大切です。札幌・北海道について何を考えていたのか？「都市と自然」に対してどうアプローチしたのか？ についても、残しておけば次につながる。手前味噌ですけれど、『WIRED』日本版のポッドキャストは大切に続けていきたいです。

あと、先ほどの「芸術祭は完成品を見る」というお話ですが、芸術祭の展示って、意外と未完成なんですよ（笑）。アーティストに聞くと「これちょっと間に合わなくて…」「すごく考え続けたんだけど、1回これで出しました」みたいな。ですから、そこから対話を始める余地が、実はめちゃくちゃあるんです！ 齋藤さんの「実験区」も「あと10年ぐらいかけて…」と確かおっしゃっていました（笑）。そこに乗っかる仕組みが入ってくると、よりドライブするはずです。

小町谷：色々と課題をいただいたので、SIAFラボとしてこれから挑戦していきたいです。札幌が道内の他都市

と違うのは、都市の巨大さにあります。自然に従属するだけではなく、自分の生存維持の戦略を立てて自然を変える力、作り替える力、そこにテクノロジーが乗っかり都市が大きくなった。世界中のモデルの一つが、札幌という町だと考えるようになりました。テクノロジーの使い方も、外部の環境を改変し大きく、加速させる方向でしたけれど、自然環境の中に住むためのテクノロジー、自然と都市をつなぐためのテクノロジーを、札幌・北海道といった寒冷地で探すことによって、都市と自然との次の関係性ができるのではないでしょうか。

船戸：SIAFラボでは、サイドプロジェクトといって道南・江差の鴎島をフィールドに活動したりもしています（※28）。札幌に限らず、北海道をどう捉えるか。有機的に活動形態を変化させながら、都市の可能性、都市間の融合について取り組んでいければと感じました。

石田：僕は最後に「ごめんなさい」と謝りたいです。都市を作るのって、結局は「人」なんですよね。僕も小町谷さんも、一応大学の教員をやっていて（笑）、本当に申し訳ないんですけど、ここに僕の教え子はいません。それって非常に反省する点で、僕はここに教え子たちを呼ばなければいけなかった。このトークを聞いた後、「どんな都市を作るのか」というイメージを彼らにさせねばならなかった。SIAFの継続についても、我々も担っていますが、教え子たちにもイニシアチブを取っていってほしい。形を変えてもいいんです。たとえ小さくても、彼らの催しが少しずつ増えていけば、新しい芸術祭になるかもしれない。そういう未来を繋ぐことをやらなければいけないと反省しました。

木ノ下：いますよ、そこに。実はうちのスタッフが教え子さんです。今日は色々な考え方、感性を導き出せる機会となりました。ありがとうございました。

※27　国内最大級のファッションとデザインの祭典。2024年は3月14〜24日、「Co-Creation」をテーマに東京都内10エリアで計100以上のコンテンツを展開した。

※28　2022〜24年にSIAFの一環として行われた「Side Effects 2022-2024」。半世紀前に音楽家デーヴィッド・チュードアらによって構想された“孤島を丸ごと楽器化する”未完のコンサート計画《Island Eye Island Ear》の今日的な実現可能性を、北海道を舞台に探求した。

構成：新目七恵
写真 © 札幌国際芸術祭2024 撮影：クスミエリカ